すでにドイツ語、ポルトガル語、日本語など、いくつかの国語に翻訳され、評価を受けていたにもかかわらず、である。

だがそれも、目まぐるしいほどの速さで変わろうとしていた。すでに〝静かな革命〟が始まり、われわれはデュプレシー政権時代のいわゆる〝大いなる暗闇〟ともすでにおさらばした。有名な〝雷電チーム〟――ジャン・ルサージュ、ポール・ジェラン＝ラジョワ、ルネ・レベックの活発な三人組が〝(ケベックの)主人はわれわれだ〟という声にこたえ、政権の座についた。今やわれわれの間で話されることといえば、ナショナリゼーション(国有化)であり、独立であり、〝ケベック的なるもの〟についてだった。そしてケベックの文学も、歌や映画と並んで、流行のひとつになったのである。

ケベック州では一九六〇年代に、学校制度の再建や教職員の再編成など、いくつかの重要な社会的変革がなされた。自ら教職にあった修道士ジャン＝ポール・デビアンが書いた「The Impertinences of Brother Anonymous(無名の修道士の出しゃばり)」という本が、州の旧式な社会制度や宗教制度、教育制度を大々的に再検討する基礎となった。この本は鋭いユーモアにあふれ、何よりも州の教育制度の欠点を痛烈に批判した。本は未曽有の売れ行きを示した。そして、何もかもが一度に動きだした――教会でも、学校でも、政治においても。大学ではケベックの作家達を熱心に研究しだした。

小説家も新しい世代の活躍が、十年あるいは十二年前頃から目立ってきた。一九七六年三月に物故したユベール・アクワンは素晴しい政治小説「Prochain Episode(次のエピソード)」を一九六五年に出版し、レジャン・デュシャルムは一九六六年に幻想的な作品「The Swallower Swallowed」を出した。同じ年、少女時代の貧困を描いたマリー＝クレール・ブレの「A Season in the Life of Emmanuel(エマニュエルの人生における一時期)」が、フランスのメジチ賞を獲得した。翌年にはジャック・ゴドゥブーの「Hail Galarneau」が出版され、続いて一九六八年にはロシュ・キャリエの「La Guerre, yes sir!(はい、戦争であります)」の出版を見た(ちなみに、以上の小説はすべて英訳されている)。ケベック文学は、スター作家や批評家、研究者も揃い、また読者もふえて、ここに発展期を迎えた。クロード・ペロカン、ギャストン・ミロン、ジル・ビニョールなどの詩人は、ちょうどアメリカにおけるギンズバーグやディランのように、一般の人々に愛されるヒーローとなった。

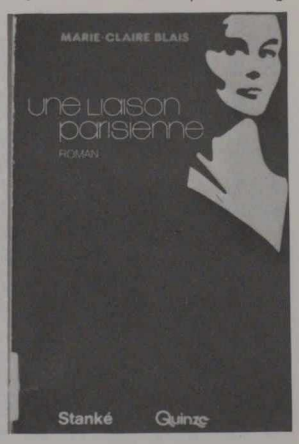
一九六〇年代は、詩人の活動(ポール＝マリー・ラポワント、フェルナン・ウーレット、アルフォンス・ピシェラ)も相変わらず続いていたが、文学の主流となったのは小説である。小説の占める社会的役割、文学上の位置が詩よりもずっと大きいということに関しては、明らかだと思われる。詩については、大衆から遊離している、門を固く閉ざし、アカデミックな専門家しか関心対象に入れていないと、して批判されることが多かった。

それ以後の十五年間というもの、小説は、ジル・マルコットの言葉を借りれば、ケベックの脈動を伝える最良の読物になった。また、ケベックの人々に最も人気のあった読物も、この州の小説だった。そういう小説は、もちろんわれわれの父親たちがラジオで聴いたものとは違う。それは〝静かな革命〟の産物であり、その後大きな変化をとげた。

過去においては、たとえばガブリエル、ロワやランゲなどの小説は歴史上の事実、大恐慌や戦後の社会現実をそのまま反映していた。実際にあったこと、すでに十分知られ、広く経験されていることを、そのまま再現しただけだったが、六〇年代、七〇年代の歴史的、社会的な怒濤の時期、古い価値がくつがえされ新しく創り直された時代の中で、小説は歴史に調和するだけの存在ではなくなった。日々新しい歴史が創られ、ケベックの歴史は、ケベック社会におけるあらゆることがらと同じように、論議の対象にされていたからである。そこで小説は、単なる過去の再現ではなく、小説自身が社会と同じ苦悶と波乱を生き、経験するようになった。

例をあげよう。ジェラール・ペセットの描く主人公たち(「Not For Every Eye」の本屋とか「La Commensale」の事務員、「La Bagarre」のジュール・ルブフなど)は、すべてのケベック人と同じように、自己の歴史の中で常に居心地の悪い思いをしている。マリー＝クレール・ブレやレジャン・デュシャルム、アン・エベール、ビクトル＝レビ・ボーリュー、アンドレ・マジョールらの作品の主人公にしても、ジャック・ゴドブーやロジェ・フールニエの初期の作品の主人公にしても、彼らを生んだ社会の姿そのままに、途方にくれ、根無し草で、不完全な存在である。

「何かが起こったのだ、僕たちの予想もしなかった、今でもまだ完全には理解してない何事かが…」と、「Le Roman à L'imparfait」の中でマルコットは書いている。ケベックの小説はますます豊かで、内容的にも文体的にもかつてないほどよくなってきた。しかしそれと同時に、われわれの歴史における諸関係を〝人間劇〟という形式の中に表現するという本来与えられた課題からは遊離してしまったように思われる。多少とまどいはあるにせよ、ランゲの「Thirty Acres(三〇エーカー)」やガブリエル・ロワの「The Tin Flute(ブリキの笛)」の中に、われわれ自身の姿を認めるにやぶさかではな

マリー＝クレール・ブレ

ブレの「Une liaison parisienne」